

ДАЧЕ-ФИЛ

田共民着の改憲公設置=反封建
民主化路線を粉砕し移転拒否、
而後再び新潟市議会議員へ前进せよ！

斗争の現局面

左右の日和見を排し、ヒ項目
条件の下、
大衆団交をあくまで追求せよ。

14回迄はの國女が拒否であり、
争解決についてこの試験設定は一切
の双方同意を尊重からずつするので
あり(6)、一の大だらけとなる立場
からのストップ理由でも、たゞ僅
のセクト的利害の争ひのために「諷刺
合戦」の実行を廃止して時代化した日本
一民族は折辱性の底条件でこの
面をこじひつけていた・江戸・文
豪才がこの問題を諷刺的視して口にする
ことによって、「本邦國女」とか前提
とされていなじ「全國民である」。
呼號令は若干の文(レ)「日本全国
民」と自認とした「本邦國民」の試
験は「子供は敵」(子供を攻める)を
加え、新たに攻撃する用意した。

長大して爆発か、勢力を返しの一撃にしてビクトリの喜びの行進を行ふのであり、それは未だ根強く存在する「大學共同体」の幻想の生物である「話しあい」「幻想」復讐し「話しあい」と言己の内化したものである。

現在の斗争が明確にへ六・一〇放風祭を変化して廻所としているにちかかららず、斗争の方向は「全印協試合」の紋章に至曲し、へ六・一〇放風祭回避した次元に休戦協定を象徴するものである。

③廻れる放風祭——呼試合の解体を記提げなし「全呼研大会」は主目的に、教科会と学生の内外利害の均衡と調整の場ではなく、权力との不和の対決を媒介とした「新しい秩序」の打撃にとって一切の積極的運営を止むえなしものである。

のではある。だが、考えてもらひさえ、日本版のを仕し甘い「火薬隊」が如何なる展望と結果を産出できるときそるのか。
近代フランスアーモニアが、政治社会と市民社会の内面の上に浮上してゐる現象を観察した時、頻繁での「突厥族」の「對抗的」行動がストレートに専門者階級の胎動に活躍すると言えるとすれば、余りのオブザーミストであることをねはむる。勿論、彼らがマルクシヒ主義者であり、専門者階級を主導された存在とするし、現代革命の担い手と學生・知識人の内に見出しているのであればそれでよいが、どうのうか、彼らがマルクス主義者として自己規定する限りにおいて、そのまゝのなことはないだらうと思つた。

一、(本編)

（一）突擊隊形成論の批判

米石へ
ては、七年に亘
すへきか。代々は、
日本軍事同盟の同連
味するところは、東
本橋的暴虐（政治的
日本帝国主義の全形
從つて、我々は敗戦

けて後王運動の向を準備
セイ。年を深は温長的には
でありながらも、その意
識アシニア反共アロッケの
主義的宣傳)に向けての
邊にわける再編であり、
本邦に張りめぐらし

全盛期を極くした余韻——一本倒
当初のあ、まき直哉は、一方におい
て、東大、北大を可どする全国學
園才きの輩のそと、筋秋刀——文部
省の筋秋刀直哉が、日本の統治の
権威と大に競ひ再び、同時に、人試
才專と留年のタイムリミット、程見
の拘束による研修会——研修会の分
極化を促進してさした。だが、文部省
は、相違外の内訌的功過に対し、直
哉に、懲戒を行ひ、守護院方の直
哉との如きの内訌を許すのうこと
によって、彼らの事例が立て廻しを討
てきこじる。學内進進派は未だ内
訌的争を統一を固めぬまに、11日
明治新政府行司へ抗議書状の提出
による、ハ推進体制裏解への危機感
がから「幕末の一策」として学生と
の話し合いい——全學集会——を提起し
てさきた。該議公の凶言吾をうひに及
國道は、このよつなか柔力が尋き出で
いた。

（二つの偏向）

だが、この分野のへん村をめつて、斗争の内訌三つの偏向が現場してきている。

オーは、「話よろい」を自己の直的化し、安易に日本とのわり込んでいた日共一民系の路線である。オニーは、空首をかぶるとしてストリーリング活動の一過であることから、「坦白回答」「「回答」立場表明」とは別の立場をもつて、アリバウトを主張する辯の実効と、政治の右翼的立派を評している想へのストリート体制の評議など、イテオロギー斗争にとどまらず、大成的に批判し、克服していく任務を放棄する以後である。

オの民衆の路筋にわしきは、当面、我々は次の三項の批判を指摘しておく。

①ナラウイニシアディアを完全に

暴力の煽鳴にあしけりした日共一派
青の会間で文房、「全學協議会」設置改
良への此れは以上に尽きるものではな
く、詳細は別稿を参照してほしい。

（「突撃隊」形成論の批判）

中核系諸君は語る。「斗争の長期化、
泥沼化がは止だ」「三船・本郷山松元
守の部隊などいたずら強固に組織できる
かが限」と。また、「あくまで、腰
田。を堅持し、戻回答は拒絶すべきだ。
こと、ここには、常に公算しようど、あ
るいは敗北しようど、必要なのは非を
協時に打つ主体（＝突撃隊）の形成なの
だ」という見解が前提されてゐる。しかし
、七十一年の射程内において現在の学生運
動、いや学園斗争が基本的に進歩し日本
はならぬ課題は、果して「突撃隊」の
形成であるうか。勿論、学園斗争は「突
撃隊」形成にとって非常に効率のめった

では、七年に向けて毎年運動は何を準備すべきか。我々は、七〇年の秋は直接的には日本軍事同盟の回復でありながらも、その意味するところは、東南アジア反共フロンティアの本格的展開（政治的至沓的展開）に向けたこの日本帝国主義の全改造にむける再編であり、従って、我々は敗戦を全改造に乗りのぐらしおよび階級決戦を想起したものとして、七年才争を社説せねばならぬことを教訓とよく主張してさだ。

西区連盟における「一の路線」、我々は「大學生體育がう安保体制拡大」と表現して、この「一の路線」は、決して、「國を「突撃隊」の発展隊に、街頭を「突撃隊」の終着點とするかの如く至少化して理解されるべきではない。

「大學田辺」ことは「フルショア・ヘゲモニー」、浪費の一一大拠点として、市民社会の权力中枢を形成する大学を・ブルジョア反対との不斷の対立を媒介して・未來安へ社会主義一共和国主義に他ならないへのヘゲモニー（概念として）に移行するういに他ならない。知的生産の

